

## マンション住民の本音、地域の本音

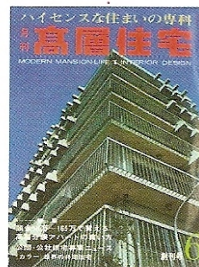
渡辺 恭子

### 1. マンション管理の雑誌づくりを経験して

#### 1) マンション管理とコミュニティの本『マンション住・人』

株式会社有朋社（1967年『月刊高層住宅』というわが国初のマンション情報雑誌を発行したマンション広告代理店）の創業50年の節目に企画されたマンション管理の雑誌。これまで売りっぱなしだったマンション＝「箱」を見直して、マンションに住まう方々のお役に立つような「マンション居住者のための雑誌」を作ろうというコンセプトで始まった。

私は、その雑誌の編集長を務めておりました。



★「月刊高層住宅」創刊  
昭和42（1967）年6月創刊。  
小社（株）有朋社が発行したわが国初のマンション専門雑誌。庶民には手の届かない高級品だった分譲マンションが、徐々に一般向け価格で建てられはじめた頃。この雑誌の出現により、マンションは「選んで買うもの」へと変遷し、物件広告というカルチャーが進化した。

▲2004年8月、創刊。

マンション管理の素人である編集長が、マンションを取り巻くさまざまな課題をあくまでも「マンション居住者の目線」でとらえ、各方面の専門家、企業、行政の方々と一緒に考えることをモットーにした雑誌。監修に飯田太郎氏。

## 2) 初めての「マンション取材」に困惑

『マンション住・人』創刊号の編集後記に、私は次のような一文を残しています。  
「管理組合を取材し記事にすることが、こんなに大変なこととは知りませんでした。・・・(中略) 編集協力いただいた皆さま、ありがとうございました。」これは決して表面的な言葉ではなく、本当に心底泣きそうになりながら書いた言葉でした。

当時、ちょうど個人情報保護法の走りで、理事長へ直接連絡する手立てもない。管理組合への取材依頼は管理会社の方を介してお願いし、月一の理事会を待つ承認を得る。ときには夜の理事会へ出向いて理事長に変わって理事の皆さんに説明する・・・等々、「マンション取材」は実に時間と手間を要すもので、綱渡りの連続でした。

まさに、「自分の家だけど、自分だけのものじゃない」のがマンションだったのです。

## 3) マンションをつくっているのは「人」だ

ところで、「マンション取材」の難しさも専門用語も何も知らない素人の私が、なぜ『マンション住・人』の編集長になったのか。

マンション管理に興味があったから？ ぜひとも記事にしたかったから？

答えは、ノーです。サラリーマンにはいろんな事情がある・・・のです(笑)

ですから、とにかく体当たり！ 関係各位の皆さんに100%ご協力を得ながら手探りで現場へ入り、冷や汗をかきかき、素人目線の質問をゼロから投げかけていきました。

すると、これまではただ通りすぎただけのコンクリートのマンションも、一歩中へ入れば「十棟十色」いろんなドラマがある。いろんな人が住んでいる。いろんな歴史がある。そしてそこに暮らす人々は、それぞれの深さで、ちゃんと自分のマンションを愛していらっしやるということが分かったのです。

「マンションをつくっているのは人なんだなあ」

そう気づいてから、私のマンション取材に対するガチガチな苦手意識は、徐々に和らいでいきました。

## 2. マンション育ちのマンションっ子

### 1) 管理人の“おばあちゃん”

私の幼少時代のことを少しお話します。

私は、西武池袋線の桜台という駅で生まれ育ち、幼稚園に上がる前、物心がついたときにはもうマンションに暮らしていました。

最初に住んだマンションは、6階建、24戸。我が家は5階。

赤レンガ敷きのスロープを上がると、エントランスに小さな管理室があって、そこに

は毎日、着物を着た管理人の「おばあちゃん」がちょこんと座っていました。

それはマンションというより「たばこ屋」の風情で、おばあちゃんはとても小さく、いつも着物の襟にガーゼのハンカチを引っかけて、白髪をお団子にし、つまらなそうに小さなテレビを見ているのでした。管理人にしてはあまりに愛想がないので、うちの祖母が事あるごとに文句を言っていたのを覚えています。

## 2) 良好な関係づくりは“挨拶”から

管理人のおばあちゃんは毎日不機嫌でしたが、私は母の言い付けを守り、「おばあちゃん、ただいま!」「おばあちゃん、こんにちは!」の挨拶を欠かしませんでした。

それには子どもなりの理由もあって、例えば、親が出かけてしまって家の鍵が無いときはおばあちゃんに頼んで家の鍵を開けてもらったり(マンション全戸の合鍵を持っていた)、外で遊んでいる途中管理室のトイレを貸してもらったり(5階まで上がるのが面倒だった)、留守番に飽きたときはおばあちゃんに鍵を預けて遊びに行ったりと、何かとお世話になっていたからです。

ある日のこと、4階の人の家の鍵がなくなって困っているから「アンタ手を貸してくれ」とおばあちゃんから頼まれ、体の細い私がお風呂場の換気窓から忍び込み、見事その家の鍵を中から開けて、拍手喝さいをあげたことがありました。

マンションの大人たちに頼られて、ちょっと嬉しかったのを覚えています。

## 3. 私たちのマンションをもっと良くしたい

### 1) 火事だ!

昨年9月半ば、わが家のマンション(6階建、24戸)の3階で火事が起きました。

午後3時半ごろ発生。出火元の一戸が全焼。原因は、煙草の不始末。

その日、家にいた私はうたた寝をしていたのですが、尋常でない異臭を感じ、慌てて飛び起き、家じゅうを調べて回りました。すると、階下からかすかに叫び声?!

「家にいる人!逃げなさい!! だれか居るか! 逃げなさい!」

え?何?! 急いでベランダから下をのぞくと(わが家は6階)、眼下には人、人、人。人々が見上げる先のベランダから真っ赤な炎がメラメラと上がっているではありませんか! モーレツな黒煙。バンバンという爆裂音。野次馬たちの悲鳴。マンションの周りが消防車で埋め尽くされ騒然としていました。

「火事だ」→「うちのマンションだ」→「逃げ遅れた」→「死ぬ」

私の思考回路はそこで止まり、全身から力が抜け、がたがたと震えがおこり、パニック、もうどうしたらいいのか分かりませんでした。私はまったく無力でした。

## 2) 鎮火後～みんながとった行動～

鎮火後。消防から許可が出て、逃げだされた住人たちはそれぞれ自宅へ戻りました。けれど、安心するどころか、とても心細くて、怖くて、家に居られないのです。

私はまた下へ降りていきました。すると、すでに人がいます。そして三人、四人、五人、、、結局逃げだされた全員が下へ降りてきて、みんなが自然と集まり、寄り添い合いました。生命の恐怖を体験した者にしかわからない、自然の行動だったと思います。

## 3) 集まって住むことの“リスク”と“安心”

マンションの火事を経験して思うのは、どんなに自分が気をつけていても、誰かが火を出したら終わり、ということだ。一つ屋根の下に集まって暮らすというのは、誰かが起こすかもしれない危険も共有することなのだと思われ、身をもって思い知らされた。

逆に、怖い思いをしても一人ではない。みんなで助け合える、励まし合える、ということも知った（精神だけでなく、「修繕費」も共にしていることを痛感しましたが）。

みんなが暮らす安心感や集まって住むからこそできる可能性を信じたいと思った。

## 4) 火事の際に「はじめまして」？！

火事後、マンションの人たちは以前より笑顔で挨拶をするようになったと思います。皮肉なことに、火事がマンションの人間関係を少し近づけてくれたようです。

結局、火事の時に、知らない者同士が多すぎた。火を出した家（出火当時留守だった）の緊急連絡先も知らなかったのだ。その後、すぐに緊急連絡網を作ることとなった。

## 5) いざという時のために“自分の存在”を知らせておく努力をしよう

マンションに友達はあるか？ いざという時に頼る人はいるか？ 自問してみると、かなり孤独な自分がいます。当たり前です。そうやって暮らしてきたからです。

でも、火事のお陰で（？）みんなと住んでいるんだということも実感しました。

そこで思うのは、これからは「あの人はちゃんと逃げたか？」とか「あの人はこの時間は会社にいるはずだ、会社に連絡してみよう」とかくらいは知っておいてもらえる自分になろうということだ。マンションの全員が、そうなる！ということだ。

マンション内で、根掘り葉掘り聞くのはお互いが避けたい。だから、各自が「自分発信」で、自分を知ってもらおう努力を日頃からすべきだと感じました。

会釈だけでなく「5秒立ち止まって」挨拶を試みる。エレベーターの中で「無言」はやめる。離れている人には「手をあげて挨拶してみる」「口角をきゅっとあげてみる」「ありがとう、を伝えてみる」何か小さな努力を行動にうつしてみませんか。自分が変われば、相手も変わる。自分が心を開けば、相手も心を開いてくれる、かもしれません。

子供のころの私が管理人の「おばあちゃん」に挨拶をし続けたように。（了）